体験版

Blue Line///
Flying Blackcat
Story by : yu watase
www12.ocn.ne.jp/~watasess/

それは私が生まれる前の話。
　地球温暖化防止だとか、オゾン層の減少だとかを世界が議論していた時、突如として世界中を襲った急激な気温上昇と気候変動が地球全体のシステム換え、飲み込もうとしていた。日本各地でも気温が軒並み上がり、水面の上昇に伴って危険な地域に退去指示が出されたが、基本的な生活に変化はなかった。その後、水面の上昇などを考慮した次世代の都市計画として水上に大規模な商業都市を建設する計画が持ち上がり、実行に移され現在ではいくつもの観光商業都市が建造され、運営されている。気候に強く、津波や災害対策も盛り込んだ都市計画プラン。いつしかそれは観光都市という名に取って代われながらも安全対策の一環として現在でも建設が進められている。
　失った景色や文化を再び戻すのは難しい。大災害が起きる度に人間はその自然の恐ろしさに畏敬の念を抱き、そして新しい技術や対策を始める。でも、時間の経過が意識を麻痺させ、気が付くと中身の無い自分たちにとって都合の良いものへと変化していく。それも今回ばかりは無理になってしまった。多くの傷跡が残り、それらは取り返しのつかない方向へと進んでしまったのだから。それでも私たちはこの地球で、日本という国で生きていく。

　関東圏に近い海上に建造された人工島『藤崎町（ふじさきまち）』ここは今までの近代的な商業都市とは違い、昭和という年代をモチーフに作られている。この街はシステムが近代化されても、内面的な部分には人間らしさを残すという非常に曖昧なイメージで建設されたらしい。そういうこともあり、この街には誇張するようにそびえ立つビル群や大規模な観光スポットは存在せず、むしろこの街全体が小さな国のような感じになっている。もちろん、学校から病院、役所まで重要な役割を果たす施設については常に最新の技術や情報がもたらされている。
　私はそんなこの街『藤崎町』が好きだった。ここから日本の本土へは定期フェリーか海中に整備されている海中道路を使う方法しかない、半ば海の上に孤立したような町。そして見渡す限りが蒼く深い海に囲まれている。そんな情景を私は気に入っていた。
　高台にある学校から家へと帰る途中にある小さな埠頭。ここからは天気さえよければ小さく本土が見える。でも、それ以上に潮の香りと海の蒼さを感じられる場所。少し長く伸びた髪が海へと走っていく潮風に揺れる。私はいつもここに来るのが日課になっていた。

「よっ、遙(はるか)。こんなところで何やってるんだ？　まーた黄昏ているのかよ」

どこからか聞き覚えのある声が聞こえてくる。同じ高校に通う遠野武久(とおのたけひさ)だ。私が高校に入ってからの友人で、たぶん、男子の中では一番よく話す方と思う。自分では文系とか言っている割には適度に焼けた肌が真っ白なTシャツから顔を覗かせている。ちょっと自信過剰なところが玉にキズだけど、悪い奴じゃない。

「何よ、そっちだって。こんなところに来たって何もないでしょ？」

「おいおい。何もないって、お前を見つけたからわざわざ来たんじゃないかよ」

その相変わらずの口振りも性格も最初はただのふざけた奴かと思っていたけど、ふとした瞬間の気遣いだったり、映画を見て泣いてみたりと結構面白いなとも思う。人前でそういう風に感情を出したりする。それはきっと恥ずかしい事ではないはずなのに、みんな忘れてしまっているのかもしれない。

「それで？　そんなこと言っても私が喜ぶ訳がないでしょ」

「連れないなぁ。いやさ、もうすぐこの町の夏祭りだろ？　俺たちももう高三だし、来年はここにいるかわかんないしさ。せっかくだから一緒にどうかと思って」

少し照れたような、途中で言葉が途切れてしまうあたり、いかにも武久らしい。普段は強がっているくせにこういうところだけ、変に繊細なんだから。それにしても、もうそんな時期かぁ。

「はぁ」

ひとつ、ため息がこぼれ落ちた。

正直、高校を出た後の事を考えてはいなかった。本土の大学に行くことは出来ると思うし、就職だって探せばこの街にはまだたくさんの求人もある。将来何をやりたいのかなんてあまり興味が無かったのかもしれないけど、まだ時間がある、そう思ってきた。

でも、時間は止まってはくれないように『卒業』という言葉が徐々に頭の中で大きくなり、現実味と焦りを生じさせる。

「俺、なんか悪いことでも言ったか？」

武久に言われ、我に返る。

「ううん。別に。ちょっと考えごとをしてただけだから。それで、何の話だっけ？」

「えっ……い、いや大した話じゃないって。また明日にでも話すよ」

武久は落ち込んだように背中を丸めながら家の方向へと歩いていく。そんな姿に思わず笑ってしまう私に気付く。

「さっきの話、どうしようかな」

男の人と一緒にいるのはあまり楽しくはない、というか何となく黙り込んでし

まう。たぶん、苦手なのだと思う。普通に話すことはできても、ある一線越えられないというか、後ろ向きになってしまう。そういえば私って『恋』なんてしたことなかったなぁ。

でも、武久の言うとおり、本当にこの街の夏祭りもしばらく見られなくなるかもしれないし、武久は自分が好きな水彩画の勉強をするために本土の学校に行くと言っていた。最後にアイツの頼みを聞いてやるのも悪くないかな。

私が家に帰ってくると、既に母さんと父さんが帰ってきていた。二人とも共働きで私が帰ってくる時間に二人一緒にいるのは珍しいくらいだ。

「ただいま。なんだか、今日は珍しいね」

「お、帰ったか遙。またいつもの場所にいたのか？　ほんとお前はあの場所が好きだなぁ」

父さんにそう言われたくないよなぁ。あの場所は両親が初めて出逢った場所だと前に聞いた事があった。何でも母が仕事でこの町に来たときに一目惚れしたらしい。だからといって私がそういうロマンチックな展開を期待している訳じゃないよね、うん。ふと、武久の横顔が頭をよぎったけど、それを素早くかき消した。

「ね、母さん、もうすぐ夏祭りなんだよね。私気付かなかったよ」

「そうね～。もうそんな時期なのね。もちろん、遙も誰かと行くんでしょ？」

その言葉に思わず身体がビクンと震える。武久との事が見透かされたようで何だか恥ずかしい。

夕飯を食べた後、部屋に戻った私は迷っていた。やっぱり、一応は返事をしておいた方がいいと思いつつも、返事をしてしまったら行く所まで行ってしまうような変な危機感もあって複雑な気持ち。それらを何とか自分の中に押さえ込みながら、携帯電話で武人の番号をゆっくりと押す。

「はい。遠野ですが、どちら様でしょうか？」

わざとらしい！　携帯の着信で私って判るだろうに。

「あ、あの…私、遙だけど」

妙に緊張して少し声が飛んだ気がするけど、そんなことを十分に考えている余裕はなかった。

「ん？　遙、どうした？　」

「別にどうってことはないんだけど、ホラ、夏祭りの話よ！」

「ああ、何だよ。やっぱりちゃんと聞いてたんじゃないか」

向こうも私の性格を知っているから、考え事をしていて気付かなかった、というよりはわざと聞き流していたんじゃないかと思っていたらしい。あの時、確かに考え事をしていて聞き取りにくくはあったけど、ちゃんと聞いていた。まったく失礼だと思う。

「ま、それはいいじゃない。それでね。まぁ折角だし、夏祭りに行ってやってもいいかなぁ～って」
「えっ、何だって！？　もっとハッキリと」
「からかってるの？　だから一緒に行ってあげるって言ってるのよ！！」
　しばしの沈黙。
　受話器からサーカスのピエロのように騒ぎながら喜んでいる武久の声が聞こえてくる。その声に、私は諦めのため息が深く身体中から出た気がした。
「武久、聞こえてる？　言っておくけど別に深い意味がある訳じゃないからね！」
「わ、分かってるよ。それで待ち合わせはどうする？」
「もう。じゃぁ、待ち合わせは…」
　待ち合わせの場所を考えていなかった。どうも電話をするだけで手一杯になっていたみたい。でも、本当にどこにしようか？　あまり学校の友達には知られたくはないし。
　私の中にちょうどいい場所が浮かぶ。あの場所なら大丈夫。
「私がいつも学校帰りに寄る埠頭でどう？　あそこならお祭りの場所まであんまり遠くないし」
「わかったよ。でも祭りの時間より早く行かないか？　実はちょっと寄りたい所があるんだけど」
　一緒に夏祭りに行くだけじゃなくて他にも寄ろうとするなんて、これじゃ恋人同士のデートと同じじゃない。そう思いかけて、夏祭りに一緒に行くのだってデートじゃないか？　という内なる声を聞いて思い直す。たまにはそれも悪くないかもしれない。でも、ここはちゃんと釘を刺しておかなくちゃ。
「いいわよ。でも、変なところには連れて行かないでよね。もしそんなことしたらどうなるか分かってるでしょうね？」
「もちろん。俺だってそんな気はさらさらないから安心してくれていいよ」
「ねぇ、今、さらっと失礼な事言わなかった？　まったく口が減らないんだから。それじゃ埠頭に着いたら電話して」
　電話を切った後、笑みのこぼれている自分がとても不思議に思える。話すまではあんなに緊張していたのに。話し始めると止まらなくなってしまう。夏祭りが楽しみになってきているそんな私がそこにいた。

体験版のあとがき

皆様！　お久しぶりです。初めての方は、よろしくお願いいたします。短編・ショートショートが半ば専門になっている『飛ぶ黒猫』の渡瀬　由です。
今回も飽きずに本作品の体験版をお手にとって頂きましてありがとうございます。

さて、この作品「Blue Line///」（あえてこう書きます）はもう夏を通り過ぎ、冬の足音が聞こえ初めようという時期に、何と「夏」のお話です。
季節外れではありますが、例の大震災以降、暗い話題が多く、夏も本来の盛り上がりに欠け、被災し、亡くなられた方も多い中で自粛の動きもありました。震災から七ヶ月以上が経ち、もう一度、明るさを、と思い今回は明るいストーリーでお届けいたします。

物語の舞台である人工島「藤崎町」そこに住む女の子の夏ノ思い出と、「次」へと繋がる物語を楽しんで頂けたらと、と思っています。

それでは本編のあとがきでお逢いできる時を楽しみにしています。

渡瀬　由